

木造弥勒如来 国宝

この弥勒如来像はこの堂の本尊であり、有名な仏師である運慶（1150～1223年）の作であるとされている。1212年頃の制作で檜の寄せ木造りである。仏教の伝統によると、弥勒は仏陀釈迦牟尼の直接の後継者であり、56億7千万年後にこの世界に生まれ、次なる仏陀となる存在である。ここでは、弥勒如来は完全に悟りを開いた仏陀としての姿で表され、この世界における未来の姿を予示している。

この像が完成したとき、その体内には数多くの文書が収められた。そのうちのいくつかには1212年という年代が記されている。さらに、源慶、静慶、運賀、運助、運覚、湛慶、康弁、康運、康正など、数多くの慶派の仏師たちの名前が、像の台座の内側に墨で書きつけられている。これらを総合すると、この像が源慶が率いる仏師のチームによって制作され、その全体を統括したのが運慶であることを示唆している。この像を構想し、その制作を指揮したのが運慶であると考えられていることから、この像はしばしば、運慶の成熟したスタイルの代表作として挙げられることがある。